

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 10

学校名・団体名	上三川町立上三川小学校
HPアドレス	http://www.kaminokawa-tcg.ed.jp/schoolhp/kaminokawaele/?page_id=17
コース	学校支援
活動・研究テーマ	新設児童育成支援室の取組 ―福祉課題をもつ児童支援の実際―
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>近年、いろいろな課題を抱えている児童が増加している。なかなか登校ができない児童、発達に課題のある児童、そして家庭において課題を抱えている児童等である。</p> <p>こうした児童の抱える福祉的課題の解決や発生予防を目的とした「児童育成支援室」を校内に立ち上げ、担当職員のスキルを向上させ、児童の抱える問題に対して、専門的に取組のできる部署を新設した。</p> <p>児童育成支援室の設置により、児童の様々な課題のアセスメントが進む研究実践である。</p>	

研究内容

- 4月 研究計画・研究推進会議を開催 校長・教頭・教務主任・児童育成支援室長・支援チーム職員6名
○児童の現状についての調査について
(不登校傾向にある児童・家庭での問題がある児童・学習状況に心配のある児童・発達に課題のある児童等についての相談)
○具体的支援実践への計画について
(・定期的校内教育支援会議の開催は各主任に参加すること ・児童のアセスメントは児童育成支援室・スクールカウンセラー等が実施)
- 5月 授業・学校行事における児童の観察、担任からの報告・申告
(授業参加の様子から支援・アセスメントの必要性を審議、昨年度までの登校日数等から児童登校の課題を精選)
(児童の登校の様子から家庭での問題・課題について考察、町福祉課との協議情報資料の作成)
- 6月 児童のアセスメント・保護者面談・専門機関との連携構築
○児童の全校行事において、複数の職員で児童を観察し、その後、課題のある児童についての意見交換を実施した
○授業の中での観察や縦割り班活動での様子など、多場面での観察を大切にした。
○町福祉課との情報交換、家庭福祉に関する情報と学校としての児童指導上の問題を提案、解決に向けての行動相談を実施



- 7月 児童のアセスメントに協力していただけるドクター・臨床心理士との相談を実施
校内支援会議や日常の児童観察から課題があると認められた児童について、担任と保護者の面談を複数回実施した。その中で、専門機関等への相談をしたいという意見のあった家庭について、診療・指導していただくドクターや心理士の先生との情報交換をどのようにしていくかを取り決め、電話又は出向いての情報提供を実施し、保護者がかかった場合、診療がスムーズにいくように配慮した。
☆個別ケース会議の開催 →児童の発達の課題で授業に集中できない等顕著な様子が観察される児童については、家庭福祉の観点からも支援が必要となる。そのため、学校からお願いして町福祉課・ドクター・心理士・スクールカウンセラー・学校関係職員でケース会議を開催した。ここでは、具体的にそれぞれの立場で何をしていくべきかを明確にし、次回、改善がどの程度みられたかを確認することを決め、会議を進行させた。
- 7月 全国情緒障害教育研究協議会に参加 校長→ 特別支援学級の編成・実施の先駆的研究発表を聴いてきた。本校では実施済の事例

8月 校内研修会開催

「障害ってなあなに」障害者福祉ネットちえのわの皆様に招聘し、校内研修会を開催した。29/7/24
職員が不自由体験をして、子どもたちの何を理解してあげなくてはいけないのか、などについて体験と家族の人の理解した。



- 8月 ダウン症のある人のセミナーへ参加 校長・育成支援室長 宇都宮市南図書館大ホール
- 9月 特別支援会議の開催 各ケースの進捗状況を確認(個人懇談の様子・福祉課の支援内容・アセスメント実施状況・ドクター所見等)
事例 通常登校が難しい児童の例→学校と家庭の密な連携が必要、登校の強要は不適、担任や友達からの声を毎日届けることを重視
事例 授業に集中できない児童の例→学校においてWISC検査を実施、保護者・ドクターと相談し、学習の進め方を再検討した
事例 家庭での養育に課題がある児童の例→福祉課職員の家庭訪問、ドクターによる療育指導、保護者面談を増やしていくことを確認
事例 家庭での養育に課題のある児童の例→担任が毎朝家庭訪問し、児童の身の回りの世話と登校指導をしていくことを確認
事例 友人や先生と感情的に生活してしまう児童の例→家庭生活のあり方を見直していただき、児童への愛着の回復を促すことで回復傾向に向かっていることを確認

10月 芳賀地区内科医連絡会研修に参加

日頃情報交換をしている内科医からの誘いがあり、「不登校傾向にある児童生徒への対応」について、ドクターの研修会がある、学校現場でも参考になることがあればということで、本校他町内小中学校の教員8名が参加させてもらうことができた。

- 10月13日~15日 宇都宮大学 原田浩治教授の御指導もあり、日本LD学会第26回大会栃木大会に本校児童育成支援室担当職員で3日間参加した。

主な内容 特別講演 発達障害の人の社会参加 大人になって幸せになるために Laura Klinger氏 ノースカロライナ大学
特別講演 絵本と子どもの心の発達 デジタル化社会に溺れないために 作家 柳田 邦男氏

参加した分科会等 ・読み書き障害とその指導 ・発達障害のある子どもの育ち ・WISC検査結果と発達支援実践の橋渡し ・地域における医療・教育・福祉の連携 ・アサーションスキルと学級づくり ・不器用さのある子どもたち 算数障害の理解と支援

10/16 研修会校内報告会を実施 原田教授指導の研修会に参加した職員6名による各分科会内容を資料とともに説明する報告会を実施

- 11月 ドクターとの情報交換 保護者面談の実施
・児童のアセスメント進捗状況と児童育成支援室の役割について、学校運営協議会・児童委員民生委員連絡会で説明した。
・保護者の面談では、春夏の時期から児童がどのように発達したのか、今後必要なことは何かについて、各1時間を準備して実施した。



- 1月・2月 研究の成果(アセスメントの結果)について校内教育支援会議で報告し、次年度への課題を整理した。

研究の成果と課題

本研究の目的である、児童の登校の状況や発達の課題等に気付いたり、発見したりして、早期にその改善に向けた取組ができるように「児童育成支援室」を設置し、職員が専門性を身に付け、その療育の最前線に当たることにより児童の福祉的課題も解決するだろうという計画で進めた。結果、保護者面談の充実、福祉課とドクター・心理士等の他機関との密な連携体制が構築されたなどの結果が得られ、課題をもつ児童のアセスメントは約8割程度はできたのではないかと考える。今後も、特に低学年児童については、1日も早期にアセスメントが成されるように努力していく必要がある。ドクターも学校も同じ意見だったが、「学校になかなか向けない子どもの現況はますます顕著だが、その一つ一つが全部背景・様子が違う、そして療育効果が直ぐには見られない。」というところが今後の課題として残っている。